大学公開講座としての
日本語教育能力検定試験対策講座

── 2011年度と2012年度の合格者の比較分析 ──

木　村　直　美

1．はじめに

2011年度から山口大学エクステンションセンター[(1)]において，公開講座として日本語教育能力検定試験対策講座が開講された。

2011年度（１年目），2012年度（２年目）とも４名ずつ，計８名の地域の社会人が合格した。2012年度までの結果が出ている時点で，両年度の合格者の比較分析をしておきたい。

2．研究の目的

今後，生涯学習の場として，更に良い講座を地域の人々に提供するためにはどうしたらよいのかを探ることを目的としている。また，合格者を分析することで多様な受講生に刺激を与え，大学公開講座という場を活かし，社会人だけでなく日本人学生，留学生も共に学び合える環境を作りたい。

3．先行研究

日本語教育能力検定試験についての研究は次のようなものがある。宮地（1987）は，試行試験の後，第１回試験の前にこれから始まる試験の在り方について述べている。林（1991）は，第１回から第３回試験を振り返り，その水準や効用について，徳川（1995）は，第8回試験までのデータを挙げ，日本語教員養成課程と検定試験との関連について述べている。

日本語教育能力検定試験についての研究はその他にも見られるが，その中でも大学公開講座に関するものは，次のものである。木村（2012a）は，大学公開講座における日本語教育能力検定試験対策講座の試みとして，基礎基本コース受講生を対象としたアンケート調査の記述から社会人の学習について述べている。木村（2012b）は，大学公開講座とそれに至る以前に大学に於いて実施した対策講座も含め，そこから輩出された合格者を合格体験記から分析している。

4．日本語教育能力検定試験

日本語教育能力検定試験（以下，検定試験）とは，公益財団法人日本国際教育支援協会が実施するもので，公益社団法人日本語教育学会が認定している試験である。目的は，「日本語教員となるために学習している者，日本語教員として教育に携わっている者を対象として，日本語教育の実践につながる体系的な知識が基礎的な水準に達しているかどうか，状況に応じてそ

れらの知識を関連づけ多様な現場に対応する能力が基礎的な水準に達しているかどうかを検定することを目的とする」[(2)]とされている。「基礎的な水準」と謳われてはいるものの，専門性の高い知識も問われる。合格率は，平成23年度試験が26.47％（受験者数5,769人，合格者数1,527人），平成24年度試験が22.97％（受験者数4,829人，合格者数1,109人）[(2)]である。

５．各年度の比較

５－１．実施概要

山口大学公開講座としての日本語教育能力検定試験対策講座（以下，公開講座）は，両年度とも「基礎基本コース」と「直前対策コース」の２コースで構成され，水曜日，13時30分～16時40分で開講された。

2011年度（１年目）は，基礎基本コースが７月上旬開始で８回（24時間）実施された。担当講師は５名であった（詳細は，木村2012a）。引き続き，直前対策コースが８月下旬開始で基礎基本コースと同時間実施，担当講師は３名であった。次の表１－１に2011年度の基礎基本コース，表１－２に2011年度の直前対策コースの講義内容を示す。講義内容の末尾に★印を付しているものが筆者担当分である。

表１－１．2011年度基礎基本コース

	講義内容
第１回	言語と心理
第２回	言語と社会★
第３回	言語一般
第４回	社会・文化・地域
第５回	聴解問題★
第６回	言語と教育
第７回	言語と教育
第８回	記述式問題★

表１－２．2011年度直前対策コース

	講義内容
第１回	言語と心理
第２回	社会・文化・地域
第３回	音声・聴解１★
第４回	音声・聴解２★
第５回	文法体系１★
第６回	文法体系２★
第７回	試験問題演習１★
第８回	試験問題演習２★

2012年度（２年目）は，１年目より１週間繰り上げ，両コースとも１回ずつ多く設定された。基礎基本コースは，６月下旬開始，９回（27時間）実施，担当講師は５名と人数は同数であるが１名の入れ替えがあった。直前対策コースは，９月上旬開始で基礎基本コースと同時間実施，担当講師は2011年度と同じ３名である。次の表２－１に2012年度の基礎基本コース，表２－２に2012年度の直前対策コースの講義内容を示す。

尚，両年度とも公開講座終了後，公開講座とは別途に特別クラスとして「日本語教師養成講座」（以下，養成講座）が同曜日の水曜日に開講され，社会人，日本人学生，留学生の受講があった。その内のほとんどは，公開講座修了生であり，フォローアップの場にもなっている。また，公開講座を受講せず，養成講座から受講し始めた受講生が数名いたが，そのほとんどが翌年度から公開講座を受講している。結果として後者の場合は，養成講座がトライアルになったことになる。

表２－１．2012年度基礎基本コース

	講義内容
第１回	言語と心理
第２回	言語と社会★
第３回	社会・文化・地域
第４回	音声・聴解★
第５回	言語一般
第６回	言語一般★
第７回	待遇表現・日本語史
第８回	言語と教育
第９回	記述式問題★

表２－２．2012年度直前対策コース

	講義内容
第１回	言語と教育
第２回	音声・聴解１★
第３回	音声・聴解２★
第４回	言語と社会
第５回	文法体系１★
第６回	意味・語用論的規範★
第７回	試験問題演習１★
第８回	試験問題演習２★
第９回	解答解説会★

５－２．研究対象者

2011年度と2012年度の公開講座を受講した合格者８名を対象とする。すべて社会人，女性である。次の表３に対象者の内訳を示すが，対象者の記号が［6-23］から始まっているのは，先行研究と統一しているためである（［1-21］から［5-22］については，木村2012b)。［6-23］であれば,「6」は通し番号,「23」は平成23年度試験を示している。つまり，平成23年度試験，2011年度に合格した人が［6-23］から［9-23］までの４名で，平成24年度試験，2012年度に合格した人が［10-24］から［13-24］までの４名である。

表３．対象者の内訳

対象者の記号	合格年度（受験回数）	受講年度	属性	日本語教師経験（ボランティアを含む）
［6-23］	2011年度（１回）	2011年度	主婦	なし※１
［7-23］	2011年度（１回）	2011年度	主婦	なし
［8-23］	2011年度（１回）	2011年度	主婦	なし
［9-23］	2011年度（１回）	2011年度	主婦	なし
［10-24］	2012年度（２回）	2011年度	主婦	あり（ボランティア）
［11-24］	2012年度（１回）	2011年度	主婦	あり（ボランティア）
［12-24］	2012年度（２回）	2011年度・2012年度	日本語教育以外の職業	なし
［13-24］	2012年度（２回）	2012年度	日本語教育以外の職業	あり（韓国で日本語小論文の講師）

※１．小学校補助教員として外国籍児童への教授経験はあり

表３に示したように，2011年度の合格者は４名全員が受講したその年に初受験で合格している。2012年度の合格者［10-24］は，2011年度に受講したが，その年は不合格となり，翌年２回目の受験で合格した。［11-24］は，2011年に受講したのだが，都合でその年は受験できず，翌年初受験で合格している。［12-24］は，２回受講し，２回目で合格した。［13-24］は，１回目は独学で受験したが不合格となり，翌年の2012年度は受講し，その年合格したというパターンである。つまり，2011年度の合格者は，４名すべて同パターンで合格しており，2012年度の合格者は，４名すべて異なったパターンで合格していることがわかる。

属性の比較をしてみると，2011年度合格者は，４名すべて主婦である。平日の昼間の開講であるため全体的に見ても主婦の受講が多い。2012年度合格者は，［10-24］と［11-24］は主婦，［12-24］と［13-24］は，日本語教育以外の職業に就き，授業のある水曜日は休みを取り受講していた。

2011年　公開講座

2012年　公開講座

ボランティアを含む日本語教師の経験の有無については，2011年度合格者は全員，日本語教師の経験はなかった。但し，［6-23］は，小学校補助教員として外国籍児童への教授経験はある。2012年度合格者は，［12-24］のみ経験がなく，［10-24］と［11-24］は，ボランティア，［13-24］は，韓国で日本語小論文の講師の経験があった。

以上のように，2011年度合格者は，属性，日本語教師経験においてもほぼ同一であり，2012年度合格者は，ばらつきが見られた。

５－３．使用教材

2011年度は，基礎基本コースと直前対策コースのテキストを別のものにした。基礎基本コースでは，アルク（2011）の『合格するための本』，直前対策コースでは，ヒューマンアカデミー（2011）の『完全攻略ガイド』である。アルク（2011）は，ポイントが押さえてあり，問題解説は充分であるが，講座テキストというよりは自学自習のほうに向いていると思われた。

ヒューマンアカデミー（2011）は，よくまとめてあり，補足していく必要はあるが，授業で使用するのに適していると思われた。そこで，2012年度は，基礎基本コース，直前対策コースの両コースともヒューマンアカデミー(2011）を使用した。

筆者の場合は，パワーポイントを使用し，授業で映すスライドとは別に配布資料用のスライドを作成した。授業内で考えてもらいたい箇所，キーワード，暗記が必要な用語は，あえて印刷されないようにし，受講生が書き込むノートとなるよう工夫した。ヒューマンアカデミー（2011）は，530ページ余りのテキストであり，その中でも近年の傾向を分析した上で，頻出の部分，重要なポイントを主に取り上げていった。

過去問も両年度とも使用した。講義内容に該当する問題をピックアップし，授業内に適宜組み込んでいった。どのように出題されるかということが示せ，有効であった。また，授業を聞くだけでなく，考える，答える，見る，書くと様々なアプローチを試み，授業というものが久

しぶりで不慣れな社会人にとって，３時間が長く感じられないよう配慮した。

６．合格体験記の記述からの分析

合格体験記を基に以下に合格者ごとに分析する。合格に至るには，受講のきっかけから受験に向けてのモチベーションの維持，受験前及び合格後の学習，日本語教育への参加までのそれぞれの文脈は切り離せないものだと判断し，合格者各々の流れとして分析していく。

６－１．2011年度合格者

６－１－１．［6-23］の分析

小学校の補助教員の経験があり，外国籍児童に文字の指導をしたり，コミュニケーションが日本語で出来るように手助けをしたりしていたことを述べている。「一緒に授業を受けて理解できない言葉を説明していました」と記していることから，いわゆる「入り込み指導」の経験もあることがわかる。

しかしながら，「日本語を教えた経験もなく，自分の力の足りなさを感じることも多々ありましたが，適切な指導も分からず手探りの状態で教えていました」と述べており，本人の意識としては「日本語を教えた」のではなく，あくまでも文字指導，コミュニケーションの手助け，理解困難な用語の解説に過ぎなかったのであろう。「日本語を教える時に系統だった適切な指導など学べる」と思ったのが申込みのきっかけだったという。

「講座では試験を受ける他の受講生と会い，一緒に講義を受けることで刺激になり，次の講座までのモチベーションを保てました」と同じ目標を持つ学習仲間の存在から刺激を受けたことを挙げている。また，自宅での一人の学習では，覚えられなかったり，問題も出来なかったりしたため勉強が嫌になってきたことも記している。「受講者の合格に向けて一生懸命に講義をされ，講義の準備もされている先生方に対して，何とか結果を残したいと思うようになりました」と合格したいという気持ちが強まったことも述べている。

「音声チェック表」という日本語の拍に含まれる子音の声帯振動の有無・調音点・調音法を選択していく表を３分でできるよう課題を出していた。それについては，「それだけでも頑張ってみようと講座帰りにコピーをしました。ストップウォッチ片手に毎日声を出してやりました。最初，６分以上かかり間違いも14カ所あったのですが，毎日，毎日やっていくこと３週間後，３分を切りパーフェクトが出せるようになったのです。検定試験近くには１分40秒で出来るようになりました」と述べている。

また，「口腔断面図もコピーをし，断面図をみて何の音か分かるようにしました。やる気が出ないときは，まずこの音声をやるとウォーミングアップになり勉強の最初に必ずやっていました」と，着実にトレーニングを積み重ねていたことがわかる。

2011年度公開講座終了後，前述の別途開講された養成講座を引き続き受講した。合格発表後もしばらく受講していたのだが，途中から小学校の仕事に復帰し，その後，日本語ボランティアも始めたという連絡も受けている。検定試験合格を活かし，日本語教育現場に参加している。

６－１－２．［7-23］の分析

もともと「日本語を教えることに興味があった」ということだが，この公開講座は「ある程度経験を積んだ人が受講するものだろう」と最初は受講すら考えていなかったという。他の公開講座や日本語ボランティア養成講座で「日本語を教えるのって，やはり面白そう。もっと勉強してみたい」と思い受講することにしたと述べている。

高校で英語の非常勤講師の経験があり，予習･復習の大切さを生徒に告げているので，「ちゃんと予習，復習をして授業に臨もうと思いました」と述べ，実行している。「自分自身が『いい生徒』になってみようと思った」とも述べ，真剣に学習に取り組んでいた。「本当は，自分でまとめのノートのようなものを作りたかったのですが，時間もなかったので，試験直前は，講師の方々から授業中に頂いたプリントの数々を見直しました。それらは，本当によくまとめてある『ノート』だったのです。それらのプリントのおかげで，頭の中を整理することができました」と配布資料も有意義に活用されていることがわかる。

「講座では，社会人，大学生，留学生と，本当にいろいろな方々が，試験に向け，それぞれがとても努力されていて，それが，とてもいい刺激となりました」と述べており，多様な他の受講生から刺激を受けていることがわかる。「受験にチャレンジできたのも，勉強しなければと思えたのも，そういった良きライバル達のおかげ」と同じ目標を持つ学習仲間と切磋琢磨している様子が読み取れる。公開講座受講中も筆者の留学生クラスの見学を何度もしており，それが記述試験の対策になったと話している。

2011年度公開講座終了後，［6-23］と同様に続けて養成講座を受講し，2012年度公開講座では，［7-23］の合格体験談の時間を設け，合格者としてのアドバイスをしてもらい，受講生のモチベーションアップに貢献があった。2012年度公開講座終了後に開講された養成講座も受講し，共に学んだ学習仲間と学習を続けた。2013年度公開講座でも合格体験談の時間を設け，受講生に刺激を与え続けている。ボランティア教室の見学をしたり，プライベートレッスンで外国人に日本語を教えたり，合格を活かし日本語教育に積極的に参加している。

６－１－３．［8-23］の分析

「海外で暮らしていた数年間に，ボランティアの方々から英語を教えて頂いた経験があり，帰国後は外国人に日本語を教えることで恩返しができればという思いがありました」と日本語教育に関心があった理由を述べている。また，小学校教諭の経験があったことも文中で述べられている。「学生に交じって学食でお昼を食べてみたり，キャンパスを歩いてみたり。平凡な日常から少し離れた特別な時間を持てたようで，それだけで満足でした」と述べている。学生時代は当然のような日常が社会人にとっては新鮮であり，また懐かしくもあるものだ。このような満足感は，民間の日本語教師養成機関等からは得られ難いもので，大学公開講座ならではの意義があると思われる。

「回を重ねるごとに，受講生の方々と話す機会が増え，いろいろな方から刺激を受け始めました」と述べていることから，同じ目標を持つ学習仲間から刺激を受けていることがわかる。「受講生の名前を覚えて下さっていた事で，受講生同士も名前を覚えることが出来，仲間意識も生まれたと思います」とあり，講師が名前を覚えることの効果があったようである。「受講

生の皆さんは，年齢層も職業も幅広く，和気藹々としながらも同じ目的に向かって切磋琢磨できる素敵な方々で，いろいろな刺激を頂きました」と生涯学習から得た学習仲間の重要性がわかる。

「過去問を解いては間違ったところを『日本語教育能力検定試験　完全攻略ガイド』を読んで確認していくという事を始めました」と述べている。「間違いが多いので，読まないといけない箇所が多過ぎて困りました」と苦労しながら努力していたことがわかる。試験当日には，「『日本語教育能力検定試験　完全攻略ガイド』は厚くて重いので，代わりに授業で頂いたプリントを持参し，直前まで目を通しました。このプリントは本当に的確に要点がまとめられていて，大変役立ちました」と，やはり配布資料を活用している。

2011年度公開講座終了後，［6-23］，［7-23］と同様，引き続き養成講座を受講した。2012年度も養成講座に顔を見せることもあり，ボランティア教室の見学もしているとのことである。

６－１－４．［9-23］の分析

受講動機は「子どもが生まれたらしばらく自分の時間は無くなるので，妊娠中に何か新しいことを学びたい」というもので，受験は出産前，合格体験記は出産後に書かれたものである。「受講したのは『直前対策コース』のみ」だったことを述べ，「自分の出遅れに焦りを感じると同時に，他の受講生よりも集中して勉強していこうと意欲が湧いてきました」と記している。同じ目標を持つ学習仲間ではあるが，基礎基本コースから受講している人がほとんどであり，その学習仲間から刺激されていることがわかる。

幼稚園に通う子どももおり，育児のため多忙で学習時間の捻出が大変であったことから，短期集中で計画的に学習したようである。文中には，「試験を意識された授業」「要点をおさえたプリント」と表現されていたが，「検定対策」と銘打っている講座に期待されるところはまさにこの部分ではないかと考えられる。また，「受講生を当てて答えさせるものだったので，長い授業時間でしたが常に緊張感を保つことができました」と述べている。指名していくことも合格につながる要因の一つだと言える。木村（2012c）でも指名されて誤答してしまったことから奮起し，合格した事例が見られている。

「『直前対策コース』の中でも，聴解問題対策は非常に充実していました」とし，「毎日少しずつでも耳を慣らしておくことが必要だと実感し，問題集や過去問の聴解問題に毎日取り組むようにしました」と述べている。多忙の中，トレーニングを重ねていたことがわかる。

「私の取り組みは『試験勉強』でしかなく，これからは『日本語教師』になるための勉強を続けていこうと思っています」と述べている。このように検定試験合格で先に知識を身に付けてから，実践を積んでいくやり方が入りやすい場合もあると思われる。「今しばらくは育児に専念し，この資格を活用する機会はまだまだ先になってしまいますが，常にアンテナを張って日本語に興味を持ち続けていきたいです」と締めくくっていたが，その後，実際にボランティア教室にも見学に行ったことがあると聞いている。

６－２．2012年度合格者

６－２－１．［10-24］の分析

「教える以上はボランティアでも一人前の日本語教師としての資格を持ちたいと思うようになりました。でも420時間をクリアするのは，気の遠くなるような話でした。そこで，日本語教育能力検定試験に合格すればいいと考えました」と述べている。「420時間」とは，財団法人日本語教育振興協会[3]が定める教員の資格の第四号に「日本語教育に関し，専門的な知識，能力等を有するもの」と定められ，それは「学士の学位を有する者及び高等学校において教諭の経験のある者については，学校，専修学校，各種学校等における日本語に関する教育若しくは研究に関する業務に１年以上従事した者又は420時間以上日本語教育に関する研修を受講した者とする」とあるからである。第一号は，「大学（短期大学を除く。）において日本語教育に関する主専攻（日本語教育科目45単位以上）を修了し，卒業した者」，第二号は，「大学（短期大学を除く。）において日本語教育に関する科目を26 単位以上修得し，卒業した者」，第三号は，「日本語教育能力検定試験に合格した者」[4]である。

第一号，第二号の条件を満たしていない日本語教師志望者の多くは，「420時間」もしくは「検定試験合格」のいずれかを選択することになるが，［10-24］の場合，「検定試験合格」を目指した。しかし，独学では困難だと思ったのが受講のきっかけである。「キャンパスは緑が多くてきれいだし，学生時代に戻ったような気持ちでとても楽しく勉強できました」と［8-23］と同様に学生時代の懐かしさと勉強の楽しさが感じられたようである。

合格体験記の小見出しに「平成23年度不合格体験記」と称し，「二つの大きな失敗がありました」としている。一つは，腕時計をしていなかったがために，時間配分に失敗し解答用紙をすべて埋めることができなかったことである。二つ目は，記述問題で「誤用の訂正の仕方」について問われているにもかかわらず，問題を最後まで読まず「正しい日本語の教え方」という的外れの解答をしてしまったことだと述べている。失敗談は，今後の受講生の同じ失敗を未然に防ぐことにつながる。しかしながら，不合格体験記の執筆を依頼するということはなかなかできないものである。したがって，この「不合格体験記」は，貴重なものとなった。また，［7-23］と［9-23］と３人で受験会場に行き，自分だけ不合格でショックだったこと，２人の合格体験記を読み，大変な努力を認識したことも触れられていた。ショックだったことを正直に述べていると共に合格体験記も参考にしていることがわかった。

学習方法については，「『繰り返す』という事が何についてもとても効果がありました」と，問題を繰り返し解き，音声を繰り返し聞いたことを述べている。「私のように420時間もクリアしておらず検定合格もしていない者が教えるのは心苦しいと思いました。自分でそんな自分を認めることができませんでした」と，モチベーションを保てた理由は，ボランティアで日本語を教えるにしても，合格していなければという強い思いだということが読み取れた。

６－２－２．［11-24］の分析

ボランティア教室で徐々に文字指導から授業の一部を担当するようになってきていたとのことである。そのボランティア教室で公開講座のことを聞いたのが受講のきっかけである。「外国人学習者と直接接する時間が増えるにつれ，日本語教師を身近に感じることができました」と述べている。前述の［9-23］は，直前対策コースのみの受講であるが，［11-24］はその逆で，基礎基本コースのみの受講である。「直前対策コースも受講したかったのですが,家庭の事情で

断念しました」と述べている。

「○○さんとは基礎基本コースで知り合いました。とても熱心に勉強をされていました。合格されたことを知り，一度お会いしました。そのとき使用されていた書籍などをいただきました。また，貴重なアドバイスもいただき，これが大変役に立ちました」と述べている。○○さんとは，2011年度に一緒に受講していた［6-23］のことである。「試験は時間との勝負なので，わかる問題から解いていく」というアドバイスをもらい，そのアドバイスを意識しながら勉強したと述べている。このように，受講生同士の交流があったことも，生涯学習の場が有意義なものになった成果の一つだと考えられる。

夫の転勤による転居があり，転居先の地域のボランティア教室とは曜日と時間が合わず，日本語教育とは深くは関わっていないと述べながらも，オンラインで言語を教え合うシステムを見つけ出し，利用しているそうである。最後に「今は自分ができる範囲内で関わっていくつもりです」と締めくくっており，何らかの方法を模索しながら，日本語教育と関わっていきたいという意思が見られた。

６－２－３．［12-24］の分析

「社会人になって数年たち，『自分の時間』を持とうと生涯学習を選択する上で，『日本語』に初めて出会いました。それまでは，日本語教育という分野を恥ずかしながら知りませんでした」と述べている。きっかけは，日本語教師になりたいというより，自分の時間を生涯学習に充てたいというものである。

［12-24］と同様に生涯学習に関わっていたいという気持ちで，受講している受講生は少なくない。３年継続しているが，受験する意思はないという受講生もいる。地域貢献を担っている大学公開講座であるため，受講料も民間とは比較にならないほど安価である。したがって，日本語教師になりたい，合格したいと強く志望して受講するわけではなく，日本語教育とはどのようなものかよく理解していないが学習したい，何かに熱心に打ち込みたいと受講している人も多い。

しかし，［12-24］のように始めてみたら面白いと受験意欲も湧き，合格まで至るケースも出てくるのだ。［12-24］は，「日本語」の面白さにとりつかれたと述べている。「授業の前後，集中して予習・復習・問題演習をするよう心がけました。過去問題集を解く際，とくに解答解説を熟読するようにしました」と，やはり予習・復習をこなしていたことがわかる。「授業では，初めて聞く用語，うろ覚えの事柄（参考書にマーカーでチェックはしてあるものの記憶にないことも）が多くあり，やはり自分一人の学習では定着しないことを思い知りました」と，自学自習のみでは定着しにくいことも述べている。

「22年度検定後の日本語教師養成講座，23年度検定試験対策講座，そして今年度，と山口大学で受講していますが，私を含め多くの方が複数回受講者です」と，公開講座開講以前から特別クラスとしての養成講座に通ってきており，合格後も養成講座を受講し，他の受講生の目標となっている。「大人になって大学で学習できる機会を得，恵まれた環境を改めて実感します」とも記され，水曜日を楽しみにしていると話していた。生涯学習の大切さ，大学の社会貢献の重要性を再認識させられる。

また,「検定試験の合格以上に得たものがあります。多くの仲間の存在です」と述べながら,受講生それぞれのバックグラウンドから学べたことについても触れており,やはり,「同じ目標を持つ学習仲間の存在」を挙げている。「魅力的な先生方と,個性あふれる仲間とともに学習した時間は,私にとってかけがえのないものです」と述べ,選択した生涯学習の時間を価値のあるものと感じていることがわかる。

「今後は,日本語教室への参加や日本語ボランティアとしての活動を視野に入れ,日本語とずっと関わっていたいと考えています」と日本語教育との関わりについても考えており,2013年度の公開講座では,合格体験談の時間を設け,後に続く受講生によい刺激を与えている。

６－２－４．[13-24] の分析

韓国で日本語小論文の講師の経験があったが,「テ形」とは何のことかさえ知らない状態だったと述べている。日本語教育の知識のないまま講師をしていたことがわかる。「日本人というだけのハッタリで教えるには限界があり,良心も痛み,焦る日々。いつか時間ができたら,日本語の教え方を勉強してみたいと思っていました」と知識のないことに対しての焦燥感やもどかしさを記している。

「実は以前にも１度独学で受験をしています」とし,公開講座で使用したのと同一のテキストで独学し,不合格であったことを述べている。「実際,今回私が合格できたのは講座の授業,配布プリント,他の受講生の方々の熱意のおかげです」と述べている。これらはすべて独学では得られないものである。「特に聴解の授業は実践的で点数に直結したと思います。試験で点を取るためのポイントがわかりやすく,独学よりずっと効率が良かったです」と,独学との比較から効率の良さも挙げている。また,「試験を振り返ってみて,やはり講座なくして合格は難しかったなと思います。定番とされている教科書は分厚く,出題範囲はあまりに広く,独学ではどうしてもムダが多くなると思います」と独学の困難さについても述べている。

「新しい仕事を始めたばかりであまり時間が取れず,試験２週間前までは基本的には週に１度,講座へ通う往復３時間の列車の中でテキスト1や配布プリントを復習するだけでした」と述べている。「テキスト１」とは,ヒューマンアカデミー(2011) を指している。遠方から仕事の合間を縫っての受講であるが,時間を捻出し学習していたことがわかる。

モチベーションの保持ができたのは,次の二つからだと読み取れた。一つは,「教室で他の受講生の熱意に触れることでモチベーションを保てたことも重要でした」と述べているように学習仲間の熱意からである。もう一つは,「生徒たちとの充実した日々があってこそ,試験に合格するんだという揺るぎない気持ちをもてた」としていることから,韓国での講師経験からだと考えられる。

これからどう日本語教育に関わっていくかについては,「今後は資格を活かして得意の添削方面で経験をつみ,生徒の日本語力を伸ばしてあげられる真の教師を目指すつもりです」と意欲を述べている。

７．まとめと今後の課題

2011年度と2012年度の合格者を比較分析すると,相違点は,受験回数,受講年度,受講回数

である。表３にあるように，2011年度は，４名すべて同一の受験回数，受講年度，受講回数である。一方，2012年度は４名すべて異なる。

2011年度合格者は，公開講座として新しく開講したため，日本語教師の経験はないが，情報に敏感な人が受講することになった。その中から学習や受験が得意で，且つ比較的学習時間が持てた人，または，集中力があり上手に時間を使えた人が順調に合格したと言える。受験前は，日本語を教えた経験はなかったのだが，合格後は，いずれの合格者も実際に教え始めたり，見学したりと，現場に参加している。

2012年度合格者は，仕事で学習時間があまりない人が２回目で合格するケースが出てきた。また，受験の不慣れさによる失敗経験から２回目では成功するケースも見られた。既に日本語を教えた経験のある人の合格が見られるようになった。

両年度の共通点は，刺激を受けたり，モチベーションを保持できたりした理由として，同じ目標を持つ学習仲間の存在を挙げている点である。したがって，受講生同士が交流を持てる場にすることも重要であると考える。また，検定試験に合格したいという意気込みが，それぞれに感じられ，予習・復習や音声のトレーニング，問題を繰り返し解く等，相当な自助努力もしていたことがわかった。前述のように「420時間」や大学主専攻，副専攻の条件を満たしていれば，日本語教師としての有資格者と見なすことになっている。しかし，その時間での実際の取り組みや会得した知識に関しては測定不可能である。林（2013）は，「養成機関で420時間をはるかに超える研修を受けていても，検定に不合格になっている場合も多々あり，それは何らかの知識の偏りや思い込みが強い人の場合である」と述べ，合格した日本語教師をどれだけそろえているかという点が日本語学校の決め手となるチェック・ポイントだとしている。

今後の課題としては，大きく４つある。１つ目は，複数回受験者の学習方法の見直しである。数回続けて受験しているうちに傾向も若干変化してくるものである。現在の出題傾向と自宅学習においての学習項目が合っているかに目を向けてもらえるよう促す必要がある。誤った思い込みにも気づかせる必要がある。

社会人向けの公開講座となったが，学生（日本人・留学生）の参加もあった。しかし，学生の合格者は両年度とも出せなかった。そこで，２つ目の課題は，学生の合格者の輩出である。大きな課題かもしれないが，留学生の合格者を出すためには，どのように指導すればよいかも検討したい。

３つ目は，この公開講座は検定試験対策であり，その検定試験とは決して容易とはいえないレベルであること，専門的な知識を積み上げていくものだと受講生に理解してもらうことである。稀ではあるが，欠席が多く，時間があるときのみ出席し，大幅に遅刻しながらも，予習・復習もせずその場だけで理解できるよう要望する受講生もいる。本稿で取り上げた８名の合格者のように自助努力をし，受験の有無にかかわらず，毎回真剣に授業に臨んでいる受講生のほうが多い。予習もせず遅参し途中からでも理解できるレベルに合わせるのではなく，予習・復習を促す工夫が必要である。

４つ目は，受講生全体の研究もしなければならないということである。合格者の分析は，講座の一部の研究に過ぎない。合格者だけではなく，受講生全体にも目を向ける必要がある。受講生全体の研究としては，木村（2012a）があるが，今後の課題として，引き続き受講生全体

の研究も行っていきたい。

【注】

（1）「山口大学エクステンションセンター」は，2013年度より「山口大学地域連携推進センター」に改称されたが，本稿では，2011年度，2012年度についての分析であるため旧称の「山口大学エクステンションセンター」としている。

（2）公益財団法人日本国際教育支援協会（2013）『平成24年度日本語教育能力検定試験・試験問題』凡人社

（3）財団法人日本語教育振興協会とは，日本語教育機関の審査・認定や海外の留学生関係機関との協議等学生の適正な受入れの促進等，日本語教育機関の質的向上を図るため必要な事業を実施している機関である。

（4）財団法人日本語教育振興協会「日本語教育機関審査内規　平成５年12月14日」
http://www.nisshinkyo.org/review/pdf/index03.pdf

【参考文献】

アルク（2011）『平成23年度日本語教育能力検定試験に合格するための本』アルク

木村直美（2012a）「大学公開講座における日本語教育能力検定試験対策講座の試み―基礎基本コース受講生 の意見からの考察―」『比較文化研究』103号，日本比較文化学会，pp.15-29

木村直美（2012b）「日本語教育検定試験合格者の事例研究―合格体験記の分析から―」『2012年度日本語教育学会中国地区研究集会予稿集』日本語教育学会，pp.1-6

木村直美（2012c）「日本語教師養成講座の成果と問題点―日本語教育能力検定試験合格者の事例研究を中心に―」『山口国文』第35号，山口大学人文学部国語国文学会，pp.44-54

徳川宗賢（1995）「展望・日本語教員養成と日本語教育能力検定試験」『日本語教育』86号（別冊），日本語教育学会，pp.22-37

林　伸一（1991）「日本語教員検定制度を考える―日本語教育能力検定試験システムを再考し，その問題点を探る―」『日本語教育』73号，日本語教育学会，pp.194-204

林　伸一（2013）「日本語学校について」『外国人留学生のための特別支援プログラム実施報告書』Ⅲ，山口大学人文学部林伸一研究室，pp.146-147

ヒューマンアカデミー（2011）『日本語教育能力検定試験完全攻略ガイド』第２版　翔泳社

宮地　裕（1987）「日本語教育能力検定試験について」『日本語教育』63号，日本語教育学会，pp.27-32

（きむら・なおみ）